



みなさんはどの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第 63 話主人公 畑山 拓海

(筑波大学大学院 システム情報学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川 (直) 研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：茨城県恋瀬川)

「白昼夢」

いつのこと？：むかしむかし

どの川？：秋田の川



ある日、何でも無いときに頭をよぎる、現実とも空想ともつかない風景がいくつかあります。

月のような衛星が空を埋め尽くさんばかりにいくつも大きく映る明け方。30 秒もあれば一周出来てしまうような、草が低く茂り風が吹き抜ける小さな惑星のうえで、衛星に手を伸ばす小さな背。

あるいは大きな広葉樹林が茂っている一方で陽光がほどよく差し込む、森林の小道と、その奥にぽつんと佇む小さな小屋。

そういう景色の一つに、その底が見透かせるくらいに水は浅く、澄み切った川があります。それは少し薄暗い木々の間に、鯨が横たわったくらいの幅で流れています。川辺から一段上がったところには、木造の瀟洒なカフェがあります。現代には似つかわしくないが、煙突から細い煙を吐き出しています。

周囲に認められるために勉強して良い学校へ行って、いい企業に入る。お金を稼ぐために好きでも無い仕事を繰り返す。人に誘われたから付き合いで出かける。なんでそれをするのか。言葉に出来る目的が無ければ、それは非合理的のくりで無駄なものにされる昨今では、これは無駄なものだろうと思います。事実、この景色に目的はありません。それを言葉で描写したこの文章にも、同じく目的はありません。この記事で稼げるわけが無ければ、言われたから書いているわけでもありません。たまたま機会が転がっていたものを拾って遊んでみたようなものです。しかし、本を読んだり音楽をつくったり、虫を捕ったりが好きな私はなんとなく、創造的な発想や考え、あるいはひらめきは、ひっそりと、じっくりとした一人の時間の中で浮かんでくるものだと、経験を通して思うのでした。

(次は福田皓輝さんにバトンを託します)